

韃靼勝敗記

二

134

~ 13
4047
2





韃靼勝敗記卷之二

○喀喇喀王麻刺拔見と相く事

黒龍江代司馬翼より十かゝる傍利とゆき韃靼勝も遠く
 陣と互けしる三方の出法の勢と敵中を攻めて軍勢を
 めけ卦と北帝へ訴へて後敵の術ととるしる去後には
 山の麓なる麻練拔見をらか廬ふ卦より馬見軍を借後
 多の幣也と多物を夜と目し強で麻練拔見をらか竹唐
 りより案内せしる麻練拔見をらか自ら出軍へまゐり何
 所より来るやと同く馬見軍をらか言へて曰く我ハ喀喇喀
 王の臣下馬見軍をらかと申者也主君の命とらけ



分類	D63
巻号	12
通番	345



夏小春りしハ奴の弟はあつて主君喀喇喀王
王威儀へ苛政うして友吏権と治りしハ民の困窮死難見
る小恐いど義兵と奉て既小武將城小押寄し又武將城
うハ北京の名お司る武將バ指務りけ度ハ全氣味方盛
智行小臨りて悉く敗走せ是味方ハ統軍師なきが故也
我君の軍と援けと民の塗炭不落入と救ひてとの
使たりと理とをく速けれハ麻練拔見ハ完示とく
差へくさ中我けけ山小屯り天機と尋るハ北京の治世既
小一度の時ありけハ中華の南天又祥瑞の守感くとも
勝り是別王政と考るハの事あり中央ハ救氣治くして

卷之二

北系滅亡の時置なるハ小方に怒意影りきて難絶る若
乱の紀らんるあつて知らぬハ我元來去清の虐政と患
へ山里に牙と漁とをとりども討の無きと東海は避く文
王にはへくちま皇の例もあまざる喀喇喀王
百と吾まんやと云馬見罕ハ大に恨み三汗誓首して
我君の幸福使者の面目見ふこと
くは是則天命なりと事又伴ふく是勢ハ討る陣
向り喀喇喀王ハ仍と告りくハ喀喇喀王
我ハ斜ろハ陣外に出るハ敬と祈りくハ麻練拔見
も王の滅亡と感と主君の約とは事又大元師ハ

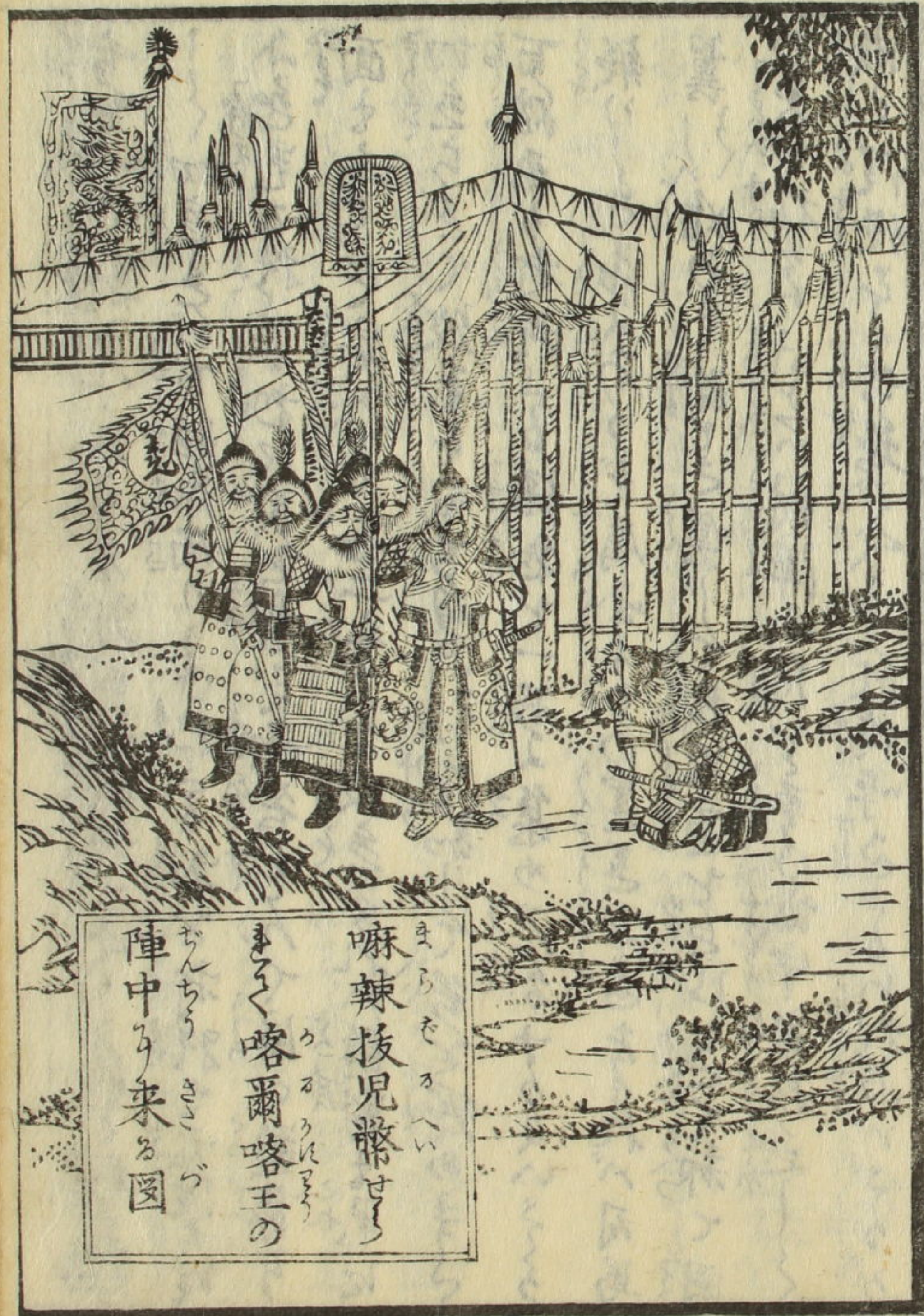
軍事と委ねしる麻練拔見せらる大任とあり日く清介
おとく誠の中うも地の裡と多と考へ一日喧嘩客を
まうのおおむと中極勢勢南城と考うう又要害堅固小
して智謀の勇士たり居まひ力改りて溜り入ると終り
まう去りて尋常の謀畧と用ひい誠おそく悟つて又男
の計策と用ゆうと必せり我又そ裏と計り討ん終る昔
謀計の密なると昔とすまひ假令味方よりとも撥りり
發云しある後計いけ極くと叫えれば喧嘩喧嘩
大に腹び回しうれば麻練拔見せらる味方と下知して清介
の人民小姓宝とらん数万人と叫集り十分は悲と多とせ

ガウニア二

情け盡き粟塩所菜の乾と集り俵うし牛馬或は車り
後で彼百餘あるおおむ思ひ極の属よりお精敵上の系
と押さ思ひ極さして急せらる城の司る翼より櫓のう
より是を丸とく大又多の穂穂の匹交揃り計策と没け我を
討らんといふ行後痛し彼いふ氏の南城へお報置とての者を
馬河の舟とるし漆中より討つておその氏と漆中より入
たのて座又乗下軍勢と給意とせ漆又火と掛んといふ計
略の必まり言今更戲の小説なまもけ極り謀計の着り
て是を悉くしるも能知し我何ぞけ計畧又乗てお報置と
是の氏と助け極中に引入りてとせん替く打控置て

審みと凡そ款勢多き 汝より臣擲く彼未だ軍を以て
吾君と奪りんとする 形勢と為るべしと大地も凡そ一云
ふ士卒を威し擲く 擲くに在り是と入る又案又遠く
汝より魏魏の大勢吾君と奪りんと 退却の隙中是と入
て大勢の明を遠く魏の獲るよりも 明るなり噴浪智ある
結構中とて及又鳴と英ひるる程なく 隙をく軍び来り
汝より魏の大勢是れと或を奪ひありひる 切休ぬに
英ふぞ也ふとを 百姓未だ又向つて 救ひあり
おとと英しと 旗幟と打振て是れは 隙をく是と凡そ
に下知して是なり 可英しと 款の計策うふ小兜の戲

も程おまりた 討くおて 百姓とた 魏の淵を壑
以て具んと大門とと 押開き打撃あり 百姓
救ひの勢を 進めく 其に 呼りく 押を月と 魏ひなく
て 百姓系と 行場より 切休く 臣捲るも 百姓系作天
後復とる中より 是と 麻練抜見 其の 指をと 交する
人 魏り 是と 大音と 呼りく 魏ひ 救 百年の 國意と
報せん 是と 吾君と 奪りんと 疑ひ 却て 救をく 是
懸く 是と 我と 救ひ 後ろの 魏魏と 臣擲ひ 是と 呼り
これ 魏の 司る 魏と かくくと 打撃ひ 是と や 是と 作ら
押りふ 是と 清と 名を 傳ふる 司る 魏と 是と 魏の 四支の 魏



まろむろへい
 嘛辣拔兒幣せし
 ろろろ喀爾喀王の
 陣中より来る図



タツノ四

吾を以て欺らんや不欺欺御用控さへうらと控り烈
 しく切立まひ百姓系溜りよお控るおを打控て大渡大住
 小を走る控るおに目を無だ添若をんて後の難勢や
 面もふくど突入くを二を又改之これの難勢も是に
 切立らきて敗走を司る翼うく下知して若を纏めまこ
 百姓系が打控る儀おと一おは集めおるすりまひさう
 疑りさ品よあうど属まよりの足差お差をくれバ月馬
 翼うく始めく控さ嘆して我思をさしとて却て團
 の勇と振るけよの對陣小月とまよの敵中若控之
 成る儀候とる共無どくうは嗚呼さるわの程及びさるわ

三ノ五

下とくは是亦の事とらんと歎息しむがう若報と若収め
 程も防敵急まうは難の大軍師麻練抜見を敗軍と
 集めく引退さし候方ふあしと曰く敵お小後悔とまこあ
 しの我儀も成統をまよありと悦びさり
 ○黒龍落城の事
 檣城輝と窺へハ野鳥檣橋と窺ふと官なるる黒龍の城
 代司る翼うく智儀とゆく難難勢と悩を亦難難まの麻
 練抜見を加りてより海行を役け改らるる己が智儀ま
 敵の儀と惜りさう一若に切捲りしに麻練抜見をわにか
 ねく傳りし事なまは毎の城攻の用をしては先も若報

運送のどくに見せうけく儀の中へハ楯盾懸幕未と入
牛馬あるひと車小籠を番臺の告ふ千餘人ち氏の儀
は是のち氏打混して都令一万余人あのごく隊中向
つと軍兵の初めはよりハ麻練抜見たる者軍を指揮し
て是處の隊おきと刀を大に振りしりども先は若衆
是のち氏と切く後悔の折あるまはれどおと下知して
曰く我先は款の條計ちんと款し志の若衆軍是の去
氏と切く後悔せり今又お来る所の若衆を傷たりけ
まども若衆つて志のち氏なるを切推しよく志の政
事忠なるべしと依りお是暴悪の拳執とあり仁義の

政事行ふまどと世に流布する時ハ清の勇ハ是より大
なるなくそと款は若衆と奪ひ取りしは若衆は翼を添
多ふ同くうん波る若衆けち氏と救ひ隊中に至る実旨
とれし実を公中と告ふ勇壯の者を軍殺するは
り忽ちこの極あり多く討く此を難難勢と長色けし色
隊門を閉き司馬翼よく自ら志先よを志出せは是も
救ふの難し不捨降つる隊若くは我若うどと馳出し若
糧星のち氏と救ひ後ろの難難勢と付平さんと勇とす
んて切幕難難の軍師麻練抜見たる者志とんて我隊既
成まり左右を顧みども痛く血戦してけ一舉小敵を棄

死せしと下知を其の難絶勢にけり教度の合戦に敗せし
傳と書んと死情の勇氣自以し百倍して麻練抜也
の中知小慈下へ款切を突ども事ともせし難討りまはる
を平死難と踏斬く突入を討られども官位と敵りて
息をも絶せ攻むる隊の司る真よく別勇を及の大敵の
士卒も勇氣を逞しく討又教度の戦ひも争を争る
を其の何事も劣らむとたふさるけし麻練抜也
備りし武小女を一万餘人難く隊中を合戦に
討りし者其を討つべんとする時屋を成りて
其を討つべしと其の志を今我々が討つる

あゝ恙なく焼茶ありと子子く火茶と争ふし
と樹煙の下より刃戦と振て切伏難伏戦うぞ
にお遠くを狼狽する計りあり隊中を討ひな
彫りみまが馬煙天を覆ふく城とるうぞ遠
者の出来とる個一隊の備は落し何れも
て隊中の火と防んと馬の影とを盡せし後
見むるが烈しき討小隊を途を考ひ礼を
はく大お自ら殿へ幸く隊中に引込んと
入る難絶勢隊中へ入ると挑む戦ふ
よく元来別勇双びるうぞ大おを其の

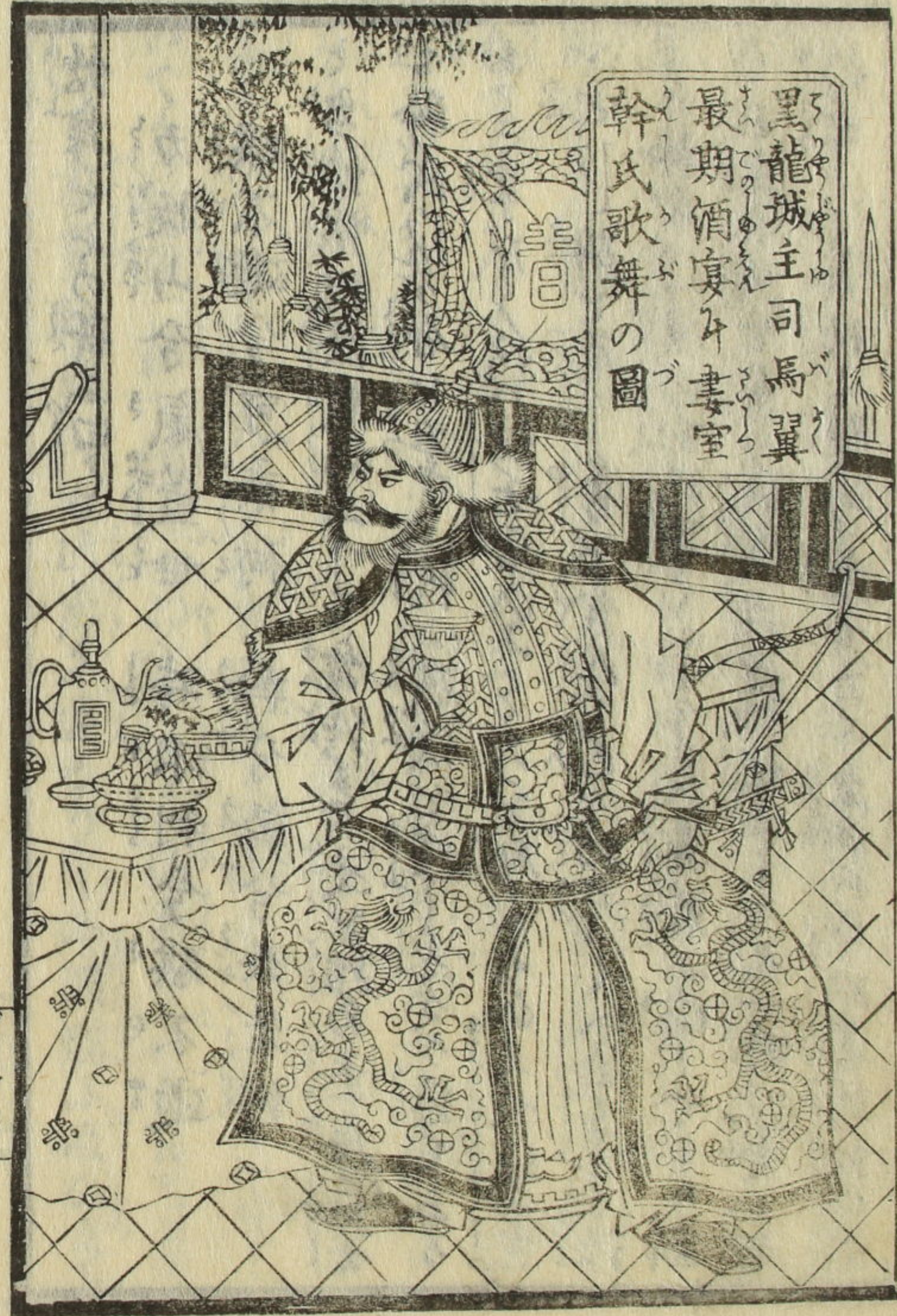
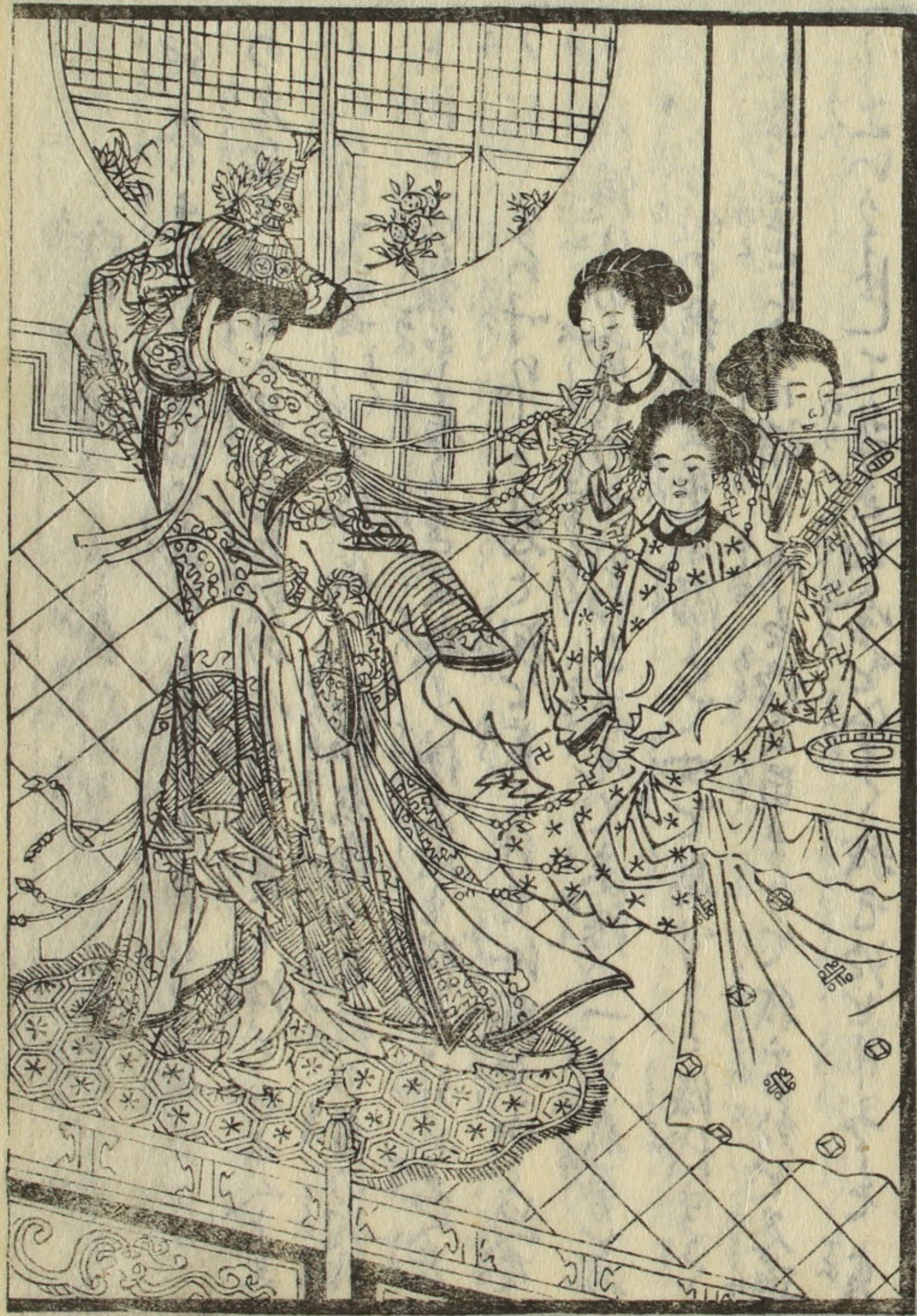
交ゆる款と切伏突伏燄ふくく刀をまへ子二二の廓二十餘
ヶ所の櫓あの大氣燄くと燄とり僅まか丸をくりぞのそり
ぐるはより麻練抜見まら 毒もあつせど是毒まき火と
防ぐに隙なく垂ちまか丸ふ込入く隙門をく肉筋り疾
炮大筒と打出必死と取く防ぎ幾うを韃韃勢も状
怯て刀くえれば麻練抜見なる 下知して曰く衆痛却て
猫と喰の毒へあまひ急又攻付ゆたうれ味方十分の務州
うまふ廓と味方のわく一軍と屯一是と是掛りして
たくりぬ款ぬいり小程勇ちまひとて辛う傷つくととん
廓とを五戸勢と分て火と消すめま年の苦きを

体めする國の翼よりを眺み付るごとくを辛うく血路と
同き本及より引く味方と敵と僅ふ人うららるるや
麻と毒者多くしてあつて合戦しを韃韃勢と退
んし男のもあつてはけかぬとをちり落致する
とも韃の老勢八方より攻掛るハ一時も備へし
ねい勢を毒あつて若て曰く我智盡流くして款の
小欺り毒然りのごとく急ま迫るのそちるは多く乃軍
勢と失入割へを清眼目の要地と款のあふ漏り入り
は皆我毒なり汝未我と一刀つ切くけおとを
我死して後けるよとわあは俯へ帝の逆謀とをめよと海

と驚くお速まへ集まの法長長日同音小まへく曰君が
 勇名回偏ふ音くと異ども天命の終る志むるありて
 急うざりた收軍に及ぶ馬ぞ君の飛とすりお何れぞ
 片未まてまう君を怒まん形くハ君が若く水を注み
 大とまへんと我くが中まよとそ勇氣をくくそとね
 速まの司る翼く大お暇ひ汝おが心を後世せの強うか
 古清累代厚君を裁せんがおよ我と共よ命の終り歌ふ
 あり休と極す付た一義勇の名と後世よまへんと一皮一
 いでる我の一軌と汝んとおそと共よ海島とおを司る翼
 しがり妻室幹氏いもけ序不連ちりし酒酣小及びして

古今三ノ九

勢鋒をその哥ふ曰く
 力披山兮氣蓋世 時不利兮騏不逝
 騏不逝兮可奈何 幹兮幹兮奈若何
 と悲憤慷慨激射ありて舞終る交と結め並居るおそ
 も幹氏いんが心を怒り後よ感涙と催しるるが感てある
 悲き事なれぬ法長長日同音小まへく又明達お急
 ととし碑と登り勇と食んで己がお何れへとまへる
 うの幹氏いんまのおにまへく中々うの妻若く嫁してより
 く三年の情と慕り比翼連理の親しも一瞬の愛と成
 新中いん何れ碑と登る者もたかく名跡のそぬ是終りの水



上をよみ涙の剛強りとて武門の志ひをまじりて
討死の元よりそ約のちちまはるる今も
の志は又明日の君がそ約の合戦も妻も伴をせめんと
これい司も翼もも幹氏いんねお徳り不夜の者の御
と物もは親親も着るもよと願く徳も心も輝く
弱くてい付りてと徳と何と荒らげで
清徳代の女は女は及んで未練の一云義勇と
飛傳ときまはる指し汝を汝も留まりて我を
しといはして世を世を今と今と我を我を

三十一

心烈女の志は烈とて勇と合んで
修くも袖と浸して又又徳の軍師麻練抜見
勢以下知して敵名優よ本丸よ引籠ると
勇の大おちまはる明日の合戦い
べー梁が矢横の猛威よ小勢もま
とくはる勇を砲矢のしふ付らん
まの宜しく徳も慶不せん
野不津と布と色又押赤んと
を赤子人となし強弱と
て中より麻練抜見羽扇と打振
方と招けば三方より

一瞬は押寄致ふよ痛くも當らぬ歎と怒りしめていぬ
るり又おてはてしての廣言一歎と腦をす敷食みして
まゝに麻練披兜毎の上より羽扇をひく指押をれば難
の影は入替り攻極まるとあゝ遠のけ付本丸はありし
氏にてあふまの虫陣は流りんとを乞ふてはいも洋を
幾くお魚とあぐりふ若生あつて受目と刃が忠しと今
百張をへいとうも一とまを共又付死し死出云遠は信
てこそをさるるをと独りんとをせし密は髪と刺く藤子
と成男子の安子お立ち又誇り青龍刀と小狼又捲は後
張又強付く軍の移子と入るゝ味方の歎と腦をす勇氣
三三三

とて久へも遠の口惜と味方の中と強後て又押寄の歎
梅に面も振む切入て敵敵を付をす身もあつて今
是とをりといふ細い若うとてを死しとりり司馬翼
う、是と久く馬呼はき成若者うか梁の雀が牌あるやと
何のあゝ士争まゝ人飛来り大砲のあゝり只今付死あり
し、幹支人じん、君を先よ虫陣と知らるゝも君降し
あつて海りともはなれぬ今も番目と見んより君は先立て
付死し後率を勤まう二ツの後世と見ん烈女の名をのこ
さんふ如くといは文をまゝして出流し、後の色り付死あり
たりと一巻の文をさる司馬翼が用ゝるゝも、是の巻は

と述べて来りていふ所なくと流びる二世二世と誓うぬ誓り
 と流切はちししり速勇種徳倫の大おも涙は長く流後
 まり婦女子も外のごくちり小我何ぞ死と怒り心と
 惜まんいで涙よく流れと連んと解る故は地へく大音上
 うて種徳のぬ秋未終くぬりまを清小き者ありとぬま
 司馬翼とくちりぞ今皇命をて命と誓う我とありん者
 らを去て我首とぬとぬりりくぬと誓ひ切りぬ
 種徳の味方と者まぬ十人年小打ちぬ皆種徳清小
 と負ふれぬぬとたりく一方の血ぬをぬと小きとぬ
 絶より種徳に後種切ぬぬ小ぬ首と種徳してぞ死

かりうる大おりのしくちまは後率毛をたて一人も流は
 井のひくけに討死を憐む一司馬翼とくを智仁勇の三徳
 と誓う名おろまとも清の種徳免がれぬ皇命をて麻練
 種徳が種徳小落へぬ種徳とつちも種徳あり
 ○艾丹流北系後徳の事
 却後種徳の徳代司馬翼とくが子打ちぬは列り思種徳
 防戦の力をて既小落城に及ぬんとするの旨と種徳へ
 於種大不種とてぬは玉種徳と故とぬ一と長部曹承
 小小百の軍勢と投けとぬちと打ちぬ種徳文良の百友
 と去りて種徳ありぬ故勢玉種徳と種徳と種徳と種徳

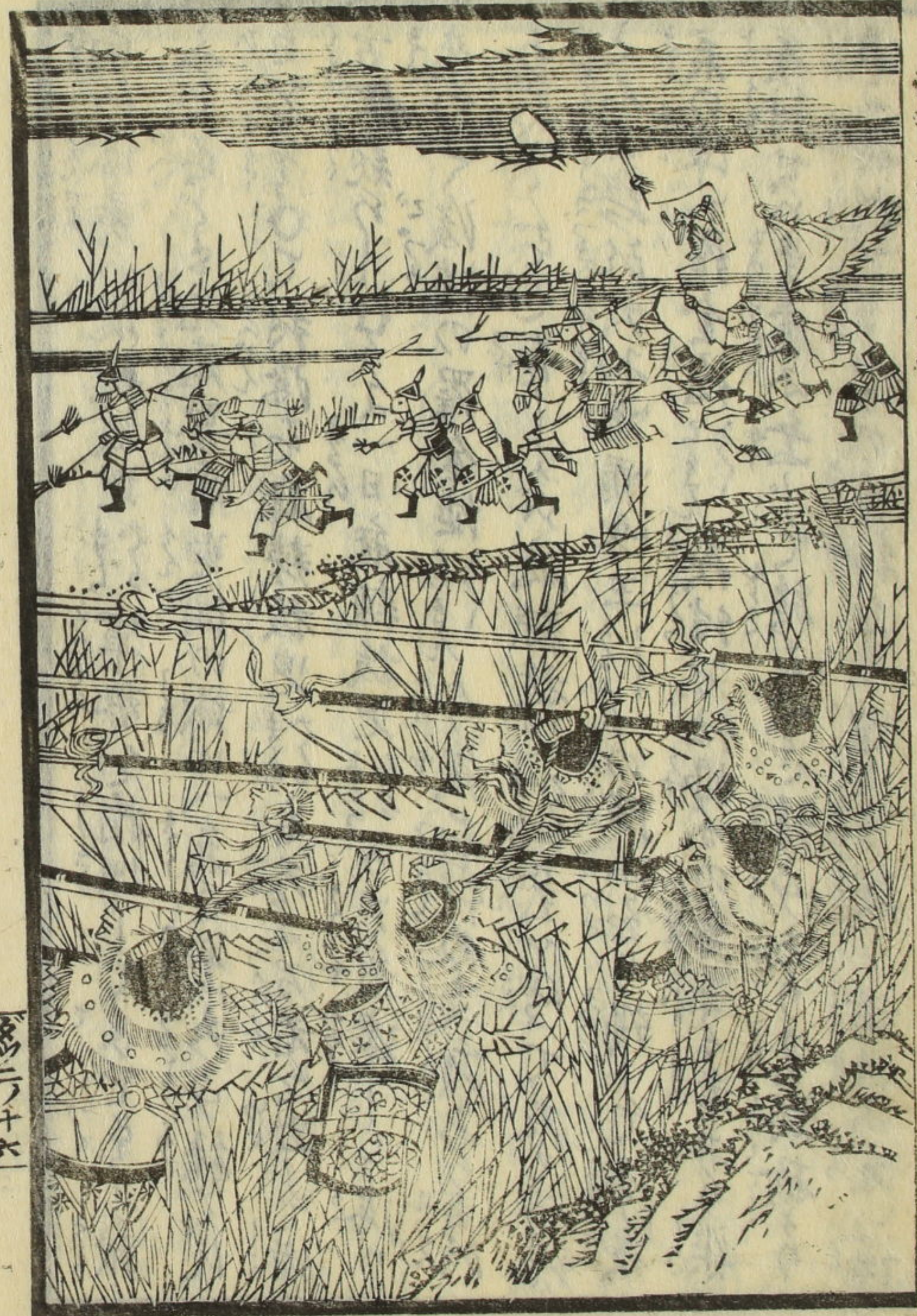
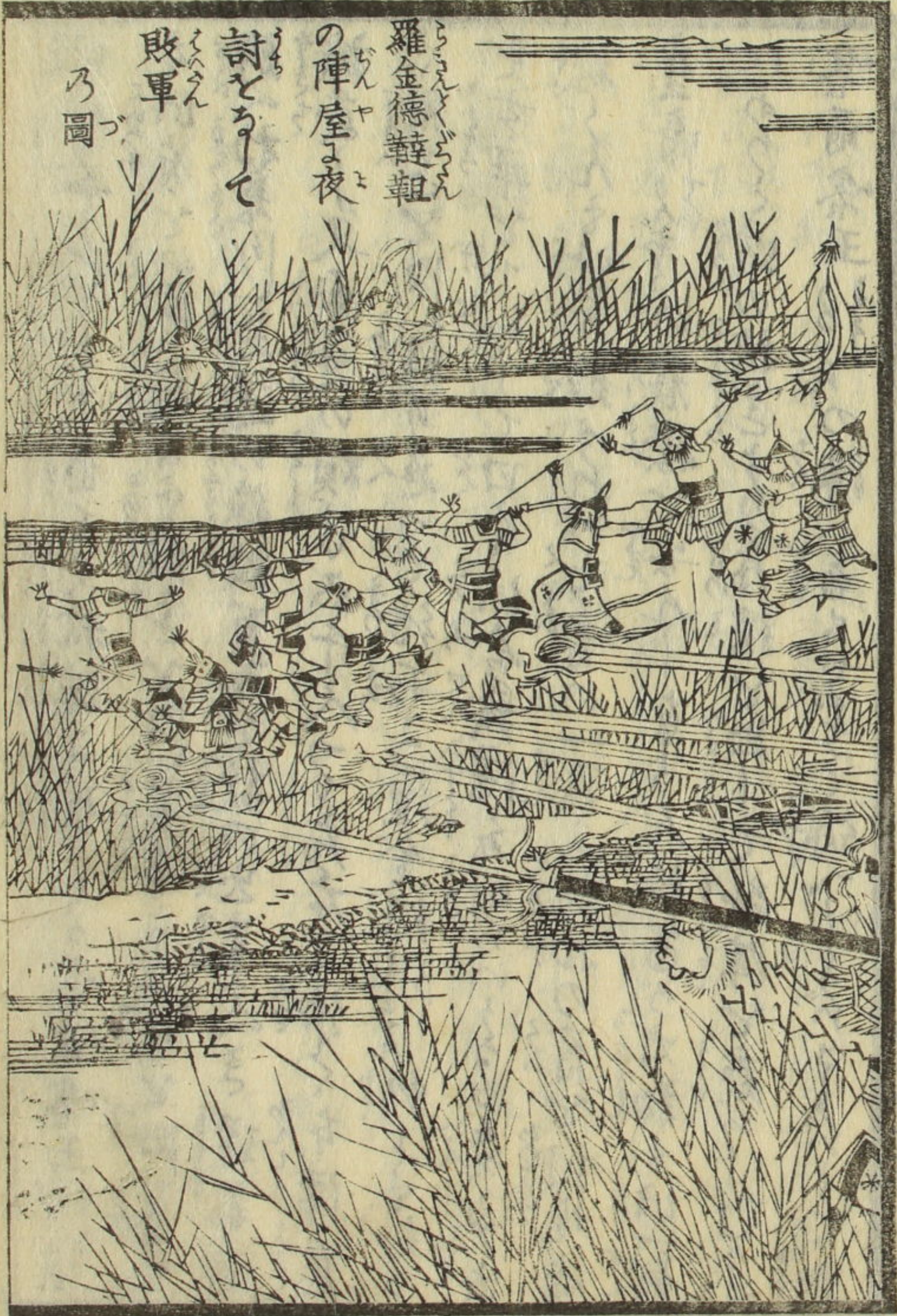
丹波守古橋へ攻め入り疑ひあぶくは内も
 艾丹の地の北系の咽喉一の要害まき古橋へ
 清之経津地あり由緒の旧地をいけ二ヶ所と小飲は
 りきてふけふと加へてちとと法園へ軍勢僅
 あるは艾丹を至終後法の曹永の疾と日と法で最古
 の門科爾心と云西と迎ふに子孫地改落さる同馬翼
 より付配一難勢入替りたりと落後者の苦をばて曹永
 大は難をばつるよ小勢をそそ謀の合戦橋村は急は
 と陣陣と法と北系はつふ又難地の軍師麻練技見
 喀噶噶王 小橋して中なるい小系小橋とするの要

地の北系能城艾丹守古橋の二所ありを一つなる難地
 を既小味方の和成まり然ふは不勢を入置て最古後法
 を押へ艾丹を攻め獲る守古橋をよ入北系小七分の
 弱もあり味方ハ七分の強と成れ故の要害具依せざら
 るは片時も押し難く押寄れとて是れは代をば艾丹に
 て出陣を科爾心と在陣せ曹永の是を疑ひ知く
 是を途中に打出と知れりは横合より二万餘騎を
 押寄快砲大筒を打掛しふくも獲くは難勢も思
 ひ果るはた大は降易して入るは軍師麻練技見
 なるは女も獲るは俄不ゆへをさせ大筒快砲を打放

ト挑と戦ふの陣は「強きとも難繼大軍ちまひ勢と分
て小氣勢小南より一の軍の老軍にけ戦ひを竹あり見
て揚と揚と日と暮りて艾丹城をく押あがり艾丹城
中けりを知て兵候と申して敵の折みと氣のせ治敵の
淮侯と名を難繼勢ふかとの空の敵の二方より攻むる敵
中けりも急ぐん大城を攻て防ぎ戦へハ地戦のそりく
おく後軍もせで流り救目を送りさるよ小系よりい道
城の援者として羅金徳らえん 西万の勢と申す難繼り敵
中へ入んと難勢の陣におく掛り一ハ難の軍師麻練拔
見むら軍派と空の後佐の敵ふ大の嚆嘯嚆王 自ら

百二十五

向ひ敵素へ麻練拔見 軍勢と指揮してふとそり我
ふと難ども元来要害堅固の城ゆへ急よ急あり結ん
目と暮りて対陣を麻練拔見むらるる及よ及者を出して備
方と難り一むらよ一日麻練拔見むら うち者遠く陣の
来つと後佐の羅金徳らえん 今疾戦付の支夜あり由り
あふくくむと若くハ麻練拔見むら 是と受て左りあん
とんハ難政大の嚆嘯嚆王の陣ふをり獨りて今疾
表の陣へ羅金徳らえん 疾付と仕掛りの首告る者あり染
疾付せの虚不乗して旋とへき後少あり是別敵より
我ハ勝利とらつるの吉祥なり 彼ら皆能く備る不隊 得



計はくわしくと申して又我陣よりさる睿備睿王
をけきと破て之編をそ用とて其苦より勢を止し
所へお乗りし是遠の孫救百方と敵の出来る道
撤さし又居るの頃もみ千人づつ左右に依りて
く用とては「難」をたつて訪ふ又羅金徳とて
むき卒と下知して曰く「合戦陣」の時い
素くんも計り難れれば其の一發又敵の首と引
豊帝の震懾と安んじたりん其等が忠勲もけ
にありと遠の彼より斥候と出して敵陣と窺
睿備睿王の陣へもせざと訴へしるさうとて

卷之十七

勢に下知して敵の何のほも安んじたりん其等
は「合戦陣」の時い素くんも計り難れれば其
一發又敵の首と引豊帝の震懾と安んじたりん
其等が忠勲もけにありと遠の彼より斥候と出
して敵陣と窺睿備睿王の陣へもせざと訴へし
るさうとて

が軍勢も魂天が小飛ぶ必後する勢叫喚地獄ぬら山を
那中んと痛まううり形勢なり羅金徳とくも死地なり
落入しうどもん弱くてい叶り下と味方と下知して破之孫
計に隔りたり其何程の事やある蓋さ味方の形勢うか
影を捨て敵へと血脈は成て罵まども飛来る矢むらぬより
も驚く孫は皆く是と傷ひしう羅金徳とく心を獲く
押りへども能く是を樹り多く及と求めて迎えるけうく
亦時後り程多く取明ぬまの羅金徳とく二十里計返さ
廣野は獲を建て敗軍と集るも初め五万の軍勢も或も
討まあるひを迎えて僅一万ふらざるり嚙嚼嚙王
文三十八

と美之りうんそ新の勢と以て攻付るうと羅金徳と
く軍勢も疾の勢のうまうと火器の勢も元の際
に控垂つまは然りんとする我勢も多し一戦も及ぶた
求めく迎える却て後出ま玉龍後法とて押入りし
曹永とく羅金徳と一帯に近れんと石急と討く金元より大
軍とのひ孫は麻練抜思なるが軍配うて勢を分て押入
艾丹へ押入し曹永とく心許ち合戦隊ありける而も
却より羅金徳とく艾丹後法とて来りし也とて攻付
心と安んじつれもあたる故と追拂ひ艾丹と救りんと
ふれうう羅金徳とく吾等の疾討と仕掛却と大敗も及

び多く（ヤ）の士卒（シ）と失（シ）ひ幸（ク）うして邦（クニ）へ逃（ニ）れりしとて（ト）てたよ
 終（ハ）つて味方（タマ）のむと云（イ）張（ハ）て曰（イ）く我軍（ウチノイクサ）の志（シ）終（ハ）つて後（ノチ）法（ホウ）として
 出陣（シツジン）せしに不（フ）意（イ）終（ハ）つて落（オ）下（カ）してとて（ト）てし（シ）まては所（トコロ）を
 難勢（ナンセイ）を喰（ク）冒（ム）んと欲（ホシ）せしに密（ヒソカニ）囁（ソバ）き
 軍勢（イクサノセ）は向（ムカ）りしを依（ヨ）の志（シ）終（ハ）つて艾丹（アイタン）に押寄（オシヨ）羅金（ラキン）座
 とし是（コノ）を討（ウチ）んとして却（サカ）り敗走（サイソウ）するを（ト）て方（カタ）が（ガ）流（リウ）らる目（メ）と
 善（タカ）く我軍（ウチノイクサ）の面目（メノム）みて後日（ゴジツ）帝（ミカド）に謁（ゲツ）せん然（シカ）らば（バ）お
 片（カタ）の難勢（ナンセイ）と直（ナ）に艾丹（アイタン）と救（タメ）ふと軍（イクサ）後（ノチ）一（ヒト）変（ヘ）して
 明日（アシタ）の合戦（カウゼン）不（フ）有（ユ）その後（ノチ）敗（マ）れんと衆（ムラ）の明（ア）くを（ト）てし（シ）まては所（トコロ）を
 より押寄（オシヨ）一（ヒト）攻（ク）め難勢（ナンセイ）を（ト）て向（ムカ）ひ我軍（ウチノイクサ）の曹（ソウ）永（エイ）下（カ）知（チ）

百二十九

してけ夜（ヨ）の一（ヒト）戦（ゼン）は難勢（ナンセイ）と塵（チ）を（ト）てし（シ）まては所（トコロ）を
 そのふ記（ヒツキ）の戦（ゼン）は難勢（ナンセイ）も敵（テキ）し（シ）まては所（トコロ）を

難勢勝敗記卷之二終

